【154】

氏　名（本　籍）	野本寛一（静岡県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第440号
学位授与年月日	昭和63年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	生態民俗学序説

主　査	筑波大学教授	文学博士	北見俊夫
副　査	筑波大学教授	文学博士	宮田登
副　査	筑波大学助教授		高桑守
副　査	筑波大学講師	理学博士	西田正規
副　査	筑波大学教授	理学博士	山本正三

論文の要旨

本論文は，「人は人をとりまく環境といかにかかわってきたか」ということを主題とし，民俗学の立場から，学際的研究の視座，とくに生態学的手法を大幅に援用し，豊富な資料を駆使して独自の構想から組み立てられた内容である。すでに，主論文題目と同名の書名を掲げ上梓されている（A5判，本文613頁，1987年3月，白水社）。

著者が如上の立場で理論を展開するに当っては，これまで20余年にわたる間に行ってきた民俗調査に裏づけられていることが大きな前提となっている。

本論文は，概観して2本の柱を持つ。①生態学的発想により，民俗事象を見つめ直す研究法の提示。②提示された方法論による民俗事象の発掘と解釈，並びに体系化である。

①では，生態学上の術語を厳密な意味でそのままの形で民俗学と結びつけることには慎重な考慮を払い，援用した主なる概念は「食物連鎖」「適応」「太陰周期」「環境傾度」「植生」「垂直分布」「平衡」「遷移」「共生」「形態学」などである。著者は，以上のような諸概念の基本や，概念形成の骨子にある分析法，概念形成の基盤にある着想や思考法を掬いあげ，積極的に民俗事象を捉え，分析する試みを果した。

本論文の構成は，次のようになっている。序章では，著者が『庶民列伝』（既刊1982年）においても顕著な実績を挙げたように，実在の人びとの体験，彼らの人生史を聞き取ることによって得た貴重な事例から説き起こしている。

第一部の「民俗と連鎖」では，「生態民俗学」の実際の一例として，1.「太陰周期と生業」に関し，静岡県榛原郡御前崎町の生業分析において，まず季節周期により時間的展開の大枠が存在し，ついで太陰周期，朔望月の中で大潮・小潮の循環に連動，さらに一日の中の干潮・満潮に応じた仕事が繰りひろげられることや，太陰周期が，牡蠣の行商範囲にまで決定的影響を及ぼしていると説いている。また，長野県佐久市桜井の事例からは，養蚕→養鯉→稲作，養蚕→養鯉→観光という民俗連鎖を確認している。なお，海岸部でイカ釣りの擬似餌にするために，山中の鹿の角が用いられ，鰹釣りの擬似餌にはカモシカの角が最適とされる事例を，南アルプス山麓の猟師と駿河湾の漁師，秋田のマタギと気仙沼の漁師がカモシカの角を媒介に結びついているなどを指摘している。
第二部「環境適応の民俗」では，民俗的生態集中と吸引主体としては，津軽平野の人びとが岩木山に輻射状に集中してきている民俗の実態把握を行っている。同様の挙例は沖縄八重山離島の人びとのコスモロジーに及び，すべての恵みの象徴である西表島の古見岳を核として形成されてきた事例が示されている。

第三部の「基層民俗から上層民俗への展開」では，民俗生成構造分析については，著者が参考論文として提出した『焼畑民俗文化論』(1984年刊）作成以来，一貫した主張をなしているものである。この視点は，「生態民俗学」による基礎理解によって，より有効に働くと述べている。すなわち，現実的・既物的，形而下的民俗を基盤として，その上に信仰・伝説・芸能・呪術などの上層民俗が発生展開するといった構造事例を追求している。

著者は，本論文において，生態学的視点で民俗事象を見つめるに際し，「食物連鎖」から「民俗連鎖」，その他「平衡伝説」「生態模倣の呪術」「形態の呪力導入」「生態伝説」「民俗モラル」などを，「生態民俗学」の「部分」を支える概念として用いている。さらに著者は，「生態民俗学」の可能性を展望して，①民俗事象を常に「自然と人間」「環境と人間」という人間存在の原点にさしもどして考える。②生業にたづさわる人びとの人生史から微細な事象までも有機的に捉え，かつ巨視的に位置づける。③民俗事象を常に発生論的に追究する。④まず民俗の基層部分を確かめ，その上に立って上層民俗までを視野に収める。⑤民俗事象の単位的研究にとどまることなく，常に民俗相互の関連を連鎖的；有機的に把握する。⑥植物の水平分布・垂直分布などを留意し，民俗の地域差とその必然性に目を配るとしている。

審　査　の　要　旨

本論文の優れた点は，①民俗学の今日的情況に鑑み，その再生をはかるために「生態学」独自の概念を吟味しながら，民俗に適用し，これまで見えなかった民俗の世界を透視する力の方向性を打ち出すことに成功したこと。②著者自身の豊富な臨地調査の体験，とくに生業を通じ，自然と深くかかわってきた古老の人生史から具体的事例を吸い上げ，独自の方法論を打ち出し，ひいては民俗を有機的に複眼的視野で捉える必要性を，いっそう強力に提示している。このことは隣接学問への

大きな刺激となり得ることである。

なお，著者に今後望まれるところは，㊀今回の方法だけでは成功しないであろう民俗事象も存在することに対し，どう対処するかということ。また，㊁敢えて「生態学」上の術語を用いなくても，十分説明がつく内容も若干含まれていること。なお，㊂挙例のなかに，やや恣意的に流れるものがなかったとはいえないこと。さらに，㊃挙例をさらに整理し，著者が本書で提唱する方法論を駆使して，一地域でのモノグラフを作成して，モデルを示してほしかったことなどである。

以上，望蜀の箇処をも述べたが，総体として民俗学の活性化に画期的な刺激を与えた貢献度は，高く評価されるものと判断される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。